

# 「小学校社会科研究」のアクティブ・ラーニング的な 設計と実践分析

松 本 成 夫

## 要 旨

本来大学の教授・学習法改善の契機として、アクティブ・ラーニングの必要性が唱えられた。それほどに質の高い学士課程教育を進める上で喫緊の課題であったということである。生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。知識伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的な学修（アクティブ・ラーニング）への転換が大学教育改革を目指す点と合致した。

その後、小中学校・高等学校においては、直近の答申・諮問・提言・報告・論点整理等を経て、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的に学ぶ学習をアクティブ・ラーニングと呼称するに至った。

現在実施している「小学校社会科研究」において、アクティブ・ラーニングを意図して授業を進めた。与えられた資料を読み講義を聴く「受け身」の授業ではなく、自分で調べ、考え、話し合う「能動的」な学習を意識し、発見学習・問題解決学習・体験学習・調査学習やグループワーク、グループディスカッションも取り入れた授業を考えた。しかし、実際には時間等の制約もあり、全てを取り入れるのは不可能であった。そこで将来学生たちが教師となって学校現場で役立つ授業内容の基本を押さえることに重点を置いた。しかし、まだ緒に就いたばかりであり、課題も多い。

## 1. 「小学校社会科研究」の視点

### (1) 本稿の目的

中央教育審議会が2012年8月28日に発表した答申「新たな未来を開くための大学教育の質的転換に向けて」（いわゆる「質的変換答申」）<sup>1)</sup>において、「アクティブ・ラーニング」という用語が大学での授業改革のキーワードとして初めて使用された。この答申によれば、アクティブ・ラーニングとは一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者に能動的な学修を促す教授・学習法である。

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業の場では育成することができない。学生の主体的な授業への参加が重要であり、ある課題を設定して、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的な学びの転換が必要ということである。

提言のように、学生が主体的な学修の体験を重ね、生涯学び続ける力を修得することは重要な課題であるが、そうしたアクティブな学びには、「学ぶこと」の意味や学校外の社会における規範的な行動の主体的な学びも含まれていなければならない<sup>2)</sup>。教える側の講義中心の授業を転換して、教員と学生あるいは学生同士のアクティブな課題解決型の授業の工夫を通して、授業課題の問題解決能力はもとより、社会生活上の規範の問題解決能力を培うことが必要となろう。

本稿の目的は、大学における「小学校社会科研究」のアクティブ・ラーニング的な授業を設計し、日常的な問題解決に結びつくような「小学校社会科研究」の授業の在り方を試論的に考察することである。

## (2) アクティブ・ラーニングの提言

まずは、「アクティブ・ラーニング」の提言の内容を概略しておきたい。

2016年8月1日に、中央教育審議会特別部会は、2020年度から小中高校で順次実施する次期学習指導要領の中間報告「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）」<sup>3)</sup>を公表した。そのポイントは、社会のグローバル化やIT（情報技術）化に対応できる力を育むため、小中高校の全教科に児童生徒が対話しながら課題や解決策を探る「アクティブ・ラーニング」の推進であるが、以下、直近の答申・諮問・提言・報告等から「アクティブ・ラーニング」推進の内容を概略しておく。

2012年8月28日に中央教育審議会答申「新たな未来を開くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」<sup>1)</sup>が公にされ、2014年11月20日には中央教育審議会に対して文部科学大臣による「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」<sup>4)</sup>の諮問がなされた。諮問の趣旨は、子供たちに必要な力を育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視し、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習や、そのための指導等の在り方についてである。具体的な検討事項としては、①育成すべき資質・能力を確実に育むための学習指導・方法はどうか。その際、②現行学習指導要領の言語活動や探究的な学習活動、社会とのつながりをより意識した体験的な活動等の成果やICTを活用した指導の現状等を踏まえた「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方、③学習指導要領等における学習・指導方法と教育内容の関連付け、さらには、④学習評価の在り方、特に「アクティブ・ラーニング」による学習成果の把握・評価である。

この諮問によって、大学教育で論じられてきた「アクティブ・ラーニング」が、初等中等教育の中心課題として取り上げられることになったのであるが、このような教育内容と授業の具体的な方法論の改革は、学習指導要領の歴史上の大きな改革であろう。<sup>5)</sup>

2014年12月22日の中央教育審議会が提言した答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体改革について」<sup>6)</sup>では、2012年8月答申を受けて、大学教育においては、初等中等教育段階における「生きる力」の育成を踏まえつつ、「学士力」としての育成すべき力の在り方や大学教育の質的転換が提言されており、大学生のアクティブ・ラーニングが大学入試の改革と関連づけられた。

さらに、2015年5月には、教育再生実行会議による「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について（第七次提言）」<sup>7)</sup>が発表された。この提言においては、小中高校から大学までを通じて、課題解決に向けた主体的・協働的で、能動的な学び（アクティブ・ラーニング）へと授業を革新し、学びの質の向上とその深まりの必要性が重視された。この提言の背景には、初等中等教育段階の教育方法の革新の趣旨が、学校現場や保護者等に適切に伝わらず、手段が目的化するなどの問題状況が生じ、現場が混乱しかねないという懸念があった。

2015年12月には、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて」<sup>8)</sup>が公表された。この答申では、これからの時代の教員に求められる資質能力として次の点が挙げられている。アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応である。そのためには、大学の教員養成段階において、①アクティブ・ラーニングに関する指導力や適切な評価方法と、②教員養成課程における課題探究的な授業の工夫、学生同士のディスカッションによる授業課題への取り組みが求められた。

教育課程企画特別部会が2016年8月1日に発表した「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）」<sup>9)</sup>では、「子供の学習過程の質を高めることの重要性」と「アクティブ・ラーニングの意義」、子供たちの主体的な学び、具体的には学級やグループの中での協働的な学びの重要性が指摘されており、「アクティブ・ラーニング」とは、「教師による一斉授業ではなく、児童生徒が自発的に学びに参加する指導、学習法」と位置付けられている。このような各種答申等の「アクティブ・ラーニング」の考え方をふまえて、次に「アクティブ・ラーニング」を取り入れた大学での「小学校社会科研究」の「授業設計」を考えてみる。

## 2. 「授業設計」の考え方と展開

### (1) 「社会科」の授業の特質

一般的に言えば、社会科の教科目標は、他者とともによりよく生きようとする「公民的資質」を育成することにある。「公民的資質」とは、各個人が相互の権利と自由を認め合いながら相互理解を深め、共同生活者としての政治・経済・文化の多様な領域の利害や課題を建設的に調整・解決しながら、社会参加をする力である。こうした公民的資質は、日本人としての自覚をもった国際社会へ主体的に参加し、持続可能な社会の実現を目指すことにより、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の育成を含んでいる。

「社会科」は子供たちの日常的・経験的な生活を通じて公民的な資質の実践的な形成を担う、きわめてアクティブな学びを必要とする科目である。社会的事象との出会い、問題解決的な学習の一層の充実、観察・調査や資料活用を通して情報を入手し的確に記録する学習、それらを比較・関連付け・総合しながら再構成する学習、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習が求められている。<sup>10)</sup>

こうした特徴を持つ「社会科」の大学における授業においても、学生自身の社会性の獲得や、学生自身による他者との議論や共存の感覚、アクティブな協働体験が必要となるだ

ろう。学生同士が相互の考えを出し合う社会性を帯びた語り合いの場を「小学校社会科研究」の授業に設定し、「社会科」で取り扱う内容と自分の積極的な関わり方を問いつつ、その問いを子供に対する授業にどのように反映させることができるのかを意識し、主体的に社会的な諸課題や人間の在り方を学ぶことが必要となる。「小学校社会科研究」は、学生自身が他者との関係を自覚して、相手の立場や気持ちを考え、共生の在り方を考える場としての授業として設計されなければならない。次に、「小学校社会科研究」の具体的な展開を考えてみたい。

## (2) 授業の準備段階

「アクティブ・ラーニング」を組み入れた授業の展開は、与えられた資料を読み講義を聞く「受け身」の授業ではなく、自分で調べ、考え、話し合う「能動的」な学習を意識し、発見学習・問題解決学習・体験学習・調査学習やグループワークやグループディスカッションも取り入れた授業でなければならない。授業の展開はまず、授業に対する初発の段階として以下のような試みを行う。

- ① 座席指定とする（視力、聴力等、配慮を必要とする場合は申し出る）。
- ② 授業は予定である。状況によって柔軟に対応する。その都度ワークシート（「本時の授業の流れ」と「アクティブ・シート」）で提示し、資料を用意する。
- ③ 毎回、次の授業の課題を出す。その課題について事前に各自調べて、自分の考えをまとめさせる。ここまでするまでが学生自身の授業準備作業（授業までに各自がしておくべきこと）である。学生は自らの考えの根拠となる図書や資料を探し、その過程で情報収集能力や情報活用能力の育成、話す、書くなどの主体的な活動を要請されることになる。

## (3) 学習形態上の取り組み

社会科を専攻していない学生が、将来、「小学校社会科」の授業を行うにあたって留意すべき課題についてグループ（4人程度）で話し合い、その後、全員で討議することとする。留意点は以下のようなことである。

- ① 他の人の考えを知り、その考え方を理解することで学びは広がるという視点を共有する。自分の考えを発信することで、思考力や表現力が高まり、また他者から新たな考えを受信する機会につながるような工夫をする。
- ② 課題についてのまとめや討議のときには、「自分の言葉で表現する」ことの重要性を共有させる。
- ③ グループ編成については、学級経営の視点を踏まえ、ネームプレートを用意し、自主的にグループ編成を行う場を設ける（4回で1サイクル）。
- ④ 各グループ代表の発表は、本時のグループの司会者が担当する。司会者は、毎回交代し、司会が苦手な者も本時はリーダーとしてグループ内の議論をもとに意見をとりまとめる。スムーズに予習（「事前学習」）ができなかった者へのフォローも含めて、学習問題を仲間間で確かめ追究していくことに意味があることを理解させる。このプロセスを通して、学級担任の思いや社会科の授業を進めていくときの心構えを醸成し、人の前で発表することが苦手な学生も、いずれ先生として人の前に立つことを想定し

て奮起を促す。

- ⑤ 講義の内容について、また、課題に関連した内容について、松本が補足説明をする。
- ⑥ 講義の最後に改めて受講学生が自分の考えをまとめる。
- ⑦ 毎時間、ワークシート（「本時の授業の流れ」と「アクティブ・シート」）を配付する。アクティブ・シートに予習した事項を「事前学習」の欄に、本時ではグループや全体の話し合いに内容を「振り返り」に、授業の最後に感想や課題を記入させる。アクティブ・シートは全員分を回収し、評価に活かすとともに、「コメント」のところに松本が一人一人所感を記入して、次時に返却する。
- ⑧ グループごとの発表は、各3分プレゼンし、その後、質疑応答を行う。発表の評価ポイントは、自分たちの意図したことが正確に伝わっているか、誰でも取り組める具体的なものであるか、課題を的確に捉え、その解決策を明確におさえているか、効果が期待できるものであるか、とする。
- ⑨ 聞く側に対する評価ポイントは、やろうとしている具体的な方策を理解しているか、グループで考えた方策に対する実践意欲を高めているか、自分たちの考えと共通しているところはないか、自分たちの考えとは異なる新たな視点はないか、とする。こうした、授業設計に基づいて、以下のように授業を展開した。

#### (4) 「小学校社会科研究」の実践例

##### 1 本授業のねらいと目標

社会科専攻ではない学生が、小学校社会科の授業を行う際に理解しておくべき基礎的な内容について、地理的分野・歴史的分野・公民的分野から重要な事項を選んで学習する。身の回りの地域から出発し、日常的な空間的・時間的・社会的な次元に沿って視野を広げる小学校社会科の発想を身に付けること、社会科授業の具体的なテーマを結びつけるコアとなる事項の知識を確実に習得することをねらいとする。

##### 2 本授業の内容と展開

社会科を構成する地理的分野・歴史的分野・公民的分野それぞれから重要なトピックを選び、これからの社会科教育の在り方について考える。

###### 1) 到達目標

- ① 戦後の教育改革の中で、社会科がどのような意図と計画で成立したかを説明でき、社会科への期待と役割を理解できる。
- ② 社会科を、小学校学習指導要領の改訂や教育課程における位置付けをふまえて学び、時代的な変遷における社会科の内容と目標が人々の生活と密接に関連していることを理解できる。
- ③ 社会科における「公民的資質の形成」を実際の生活と関連づけて、具体的に理解・説明できる。
- ④ 社会科の内容、構成や関連事項について説明できる。
- ⑤ これからの社会科について期待される指導の在り方を探究し、実践的に考えることができる。

授業の展開を以下のように計画する。

2) 授業計画

- 第1回 オリエンテーション—本講義の概要—
  - 第2回 社会の変化と社会科教育 (1) ～社会科教育の新たな発展と教師の専門性
  - 第3回 社会の変化と社会科教育 (2) ～社会科の目標・内容と学力
  - 第4回 社会の変化と社会科教育 (3) ～変化する社会と社会科の授業
  - 第5回 小学校社会科の授業づくり (1) ～小学校学習指導要領社会
  - 第6回 小学校社会科の授業づくり (2) ～学習指導案の作成 (単元レベル)
  - 第7回 小学校社会科の授業づくり (3) ～学習過程とその指導 (授業レベル)
  - 第8回 小学校社会科の授業づくり (4) ～社会科の学習評価
  - 第9回 小学校社会科の授業づくり (5) ～3・4年生の授業 (地理的分野 [1])
  - 第10回 小学校社会科の授業づくり (6) ～3・4年生の授業 (地理的分野 [2])
  - 第11回 小学校社会科の授業づくり (7) ～5年生の授業 (地理的分野 [1])
  - 第12回 小学校社会科の授業づくり (8) ～5年生の授業 (地理的分野 [2])
  - 第13回 小学校社会科の授業づくり (9) ～6年生の授業 (歴史的分野)
  - 第14回 小学校社会科の授業づくり (10) ～6年生の授業 (公民的分野)
  - 第15回 本講義のまとめ
- 試験

#### 4 本時の授業の展開（※毎回配付 例：第5回）

### 第5回 小学校社会科研究 a・b

平成28年5月13日（金）

#### 1 前回の講義から

◇学んだこと

◆疑問なこと

#### 2 本時の課題

小学校社会科の授業づくり①～小学校学習指導要領解説社会編）

##### 課題④

○ 教科書を分析するときに大切なことは何か？

○ 力がつく、楽しい、わかる授業づくりのために大切なことは何か？

##### (1) グループでの話し合い

##### (2) 全体での話し合いと説明

○ 話し合い…「課題④」について

○ 説明…小学校社会科の授業づくりでまず考えなければならないこと

##### 参考資料

○ 小学校学習指導要領解説社会編（平成20年8月）文部科学省

○ 配付プリント

#### 3 本時のまとめ

◇ この授業を振り返って

◇ 他の考えに触れて…さらに考えを深めて

#### 4 次時の課題について

##### 課題⑤（小学校社会科の授業づくり②～学習指導案の作成（単元レベル）

○ 教材研究とは何か？

○ 小学校社会科の教材研究において、大切なことは何か？



## 5 アクティブ・シート（※毎回配付 例：第5回）

（表）

第5回 小学校社会科研究 a・b（アクティブ・シート）	
文学部・児童教育学科・児童教育専攻	学生番号（                      ） 氏 名（                      ）
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>課題④</p> <p><input type="radio"/> 教科書を分析するときに大切なことは何か？</p> <p><input type="radio"/> 力がつく，楽しい，わかる授業づくりのために大切なことは何か？</p> </div>	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>資料④</p> <p><input type="radio"/> 小学校学習指導要領解説社会編（平成 20 年 8 月）文部科学省</p> </div>	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>事前学習</p> </div>	

（裏）

平成 28 年 5 月 13 日（金）	
文学部・児童教育学科・児童教育専攻	学生番号（                      ） 氏 名（                      ）
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>振り返り</p> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> </div>	



感想・課題
コメント

### 3. 学生による「アクティブ・ラーニング的な授業展開」に対する評価

本講義「小学校社会科研究」は、アクティブ・ラーニングをベースにして、①社会の変化と社会科教育、②小学校社会科の授業づくり（前半：単元・授業レベル、学習評価／後半：3・4年～6年生の学習指導案づくり）に取り組んだ。事前に、学生たちに次のように伝えておいた。「きちんとした学習指導案づくりは、体裁の整ったものを作り上げればよいということではない。自分の頭で考えて、自分が納得する授業づくりをやること。形式ではなく、考え方を大事にすること（真似するのではなく、自分自身で考える）。今やっていることは、社会科のみならずどんな教科にも活用できるはずである」。本授業の受講学生は教育実習をまだ経験していないが、本講義の授業過程において、子供主体の授業の実践を探究し、どのように問題発見・解決学習を展開するかについて腐心していた。本講義「小学校社会科研究」の終わりに、学生による本授業の簡単なアンケート調査を実施し、本授業のアクティブ・ラーニング的な展開・実践の評価を行ってみた。

#### (1) 学生（87名）の数値的評価（質問項目については「資料」を掲示）

- ① アクティブ・ラーニングの基本的な考え方は理解できましたか。
- ② アクティブ・ラーニングを行い、主体的に活動できましたか。
- ③ アクティブ・ラーニングをもとに、グループでの話し合いをすることができましたか。
- ④ 学校現場に出たら、クティブ・ラーニングをもとにした授業をやっていきたくと思いますか。
- ⑤ この授業でよいと思った点、改善すべきについて（具体的に述べてください）。

	①	②	③	④	⑤
十分に満足できる状況	79.4%	74.8%	75.8%	72.4%	88.6%
おおむね満足できる状況	10.3%	12.6%	14.9%	16.1%	3.4%
努力を要する状況	10.3%	11.5%	9.2%	11.5%	6.9% (改善)
無答	0%	1.1%	0%	0%	1.1%

## (2) 学生の主な自由意見

- ① アクティブ・ラーニングを意識した授業を受けて、今まで受け身の授業が多かったことに気づいた。初めは抵抗感があり、みんなの前での発表は苦手だったが、回数を重ねているうちに、グループでの話し合いにも積極的に参加できるようになり、発表も少しずつ慣れることができた。自分が教師としてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業をする前に、自分自身がアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を体験することができて、とても実りある授業になった。アクティブ・ラーニングの大変な点、難しい点が分かり、身につく力もたくさんあることを知った。この体験を生かし、自分のつくる授業に生かしていきたいと思う。
- ② アクティブ・ラーニングの大切さについて学ぶことができた。思考を活性化する学習形態であり、実際にやってみて考える、意見を出し合って考える、分かりやすく情報をまとめ直す、応用問題を解くなど様々な活動を通して、授業の工夫を理解できるようになった。少人数でグループを作り、司会者を立て、授業の構成を考えたり、児童にどんなことを学ばせるのかなどを話し合ったりして、自分の意見が言えるようになった。アクティブ・ラーニングは相手の考えと自分の考えの共通点や相違点を知ること、いろいろなものの見方があるのだと分かった。普段なら言いにくいことでも少人数で話し合うことで、思ったことや感じたことを率直に言えるし、自分以外の視点に立ち、他者を理解することができるようになった。意見をまとめたり、より内容の濃い話し合いをしたりして、コミュニケーション力の向上を実感できた。
- ③ 私は最初とてもとまどいもあったが、他のどんな授業よりも集中して取り組み、自分から調べ学ぶ力や積極性が身に付いた。社会科で身に付けなければならない「学力」とは何か、また、社会科を教える上で身に付けなければならない「専門性」とは何かという土台となるべき問題に始まり、最後には学習指導案の一部をグループで話し合い、考えられるまでに成長することができた。座学の授業に比べ何倍もこの授業に対して入り込むことができたし、図書館に行って他の文献を参照したり、与えられた教材に加えて知識を広げることができた。また、自分の考えだけでなく、グループの意見も取り入れることで、以前より考えを深めることができた。能動的に学習することの楽しさを、将来教員として子供たちに教えていきたいと思った。グループでの話し合いや発表では、皆が協調して取り組むことで、グループ全体の雰囲気が活発になり、

最終的に自分で事前に学習した以上に理解を深めることができたと思う。

- ④ アクティブシートで個人作業として課題を出して（予習）、それに対してグループで話し合い、発表して、意見を共有するという授業の形態はとても実になると思った。また、グループを何回か変えていろいろな人と関わられるようにするのはよいことだと思う。しかし、前もって何人、何グループ作るのか、男女の数を考えながら組もうと思うと時間がかかってしまう。小学校で自由にグループを作らせようとする、仲良しグループに偏ってしまうのではないかと思う。先生が適当にグループを決めた方がもっと効率がよくなるのではないか。

#### 4. 授業設計と授業展開の課題

学生による授業のアンケート調査の結果・評価は、上記のように概ね肯定的であり、本講義のねらいを一定程度達成していたと思われる。

「大学の授業で話し合いの活動をする機会がなかなかなかったため、この社会科でのアクティブ・ラーニングはとても勉強になったし、経験できてよかった。先が見えない社会の中であるからこそ、子供の未来まで考え、子供のためになる授業ができるような教師になりたいと思う」というのは、学生の真摯な声として受け止めなければならないであろう。「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」<sup>4)</sup>では、子供たちに求められる資質・能力として、何事にも主体的に取り組む意欲や多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーションの能力、豊かな人間性の育成等が挙げられている。教員をめざす学生が自らの体験として大学の授業の中でアクティブ・ラーニングを含んだ学習に慣れておくことは、こうした課題の達成に、きわめて重要なことではないかと思われる。

本講義の課題も、学生により指摘されている。「アクティブ・ラーニングのデメリットは、時間がかかり、グループの考えがまとまらないケースがある。改善点として、もう少し時間配分の調整をすることが必要。グループの考えがまとまらないのであれば、課題とされている授業内容が難しいことが考えられる」。学生のこの指摘は、本講義に対する指摘であるとともに、小学校での「社会科」の授業実践に対する指摘でもある。ここでは問題点が二つ指摘されている。大学での本講義に対しては、何を学ぶのかを十分認識させることの重要性が指摘されている。大学では、活動あって学びなしとならないように、社会科の授業設計や教材研究、授業分析等を実際に行うことを通して、さらに実践的な指導力の基礎を身に付けることに取り組んでいく必要がある。小学校社会科の授業実践では、1単位時間時間の中でのアクティブ・ラーニング活動の時間の確保である。小学校では、年間指導計画の見直しとカリキュラム・マネジメントの工夫を図る中で話し合い活動や実践活動に留意し、単元の目標と内容の重点化に取り組み、何を学ぶのかを十分確認することが必要である。

また、アクティブ・ラーニングを実践する上で学習環境の重要性を学生から指摘された。「将来、私は小学校の教壇に立つ。アクティブ・ラーニングを取り入れた魅力ある社会科授業の創造のために大切だと思うことの一つ目は学級づくりだ。子供たちがいくら学びへの

意欲を表していても、整っていない人的環境、物的環境の中では効果的な学びを得ることはできず、むしろ学びへの意欲を失わせてしまう可能性もある。互いに助け合い認め合える友人関係のサポート、教室内を学習の場として整えることが、主体的かつ協働的に課題の発見、解決を行うアクティブ・ラーニングの第一歩であると言える」。たしかに、共感的人間関係があり自己存在感のある学習環境はあらゆる授業の前提条件である。

本授業のアクティブ・ラーニングの前提としては、常に教員としての意識を喚起させることに留意した。本授業中の学生の私語、遅刻、携帯電話、居眠り等の行為が皆無であったことは、将来教師としての態度の意識下の表れであろうし、学生自身のアクティブな授業への参加によるものと思われる。また、グループ編成（4回ごとにメンバーを変える）では機械的なシャッフルはせず、自分たちで自主的な取り組みをさせるところから始まった。グループを作る条件は、今まであまり交流のなかった人との交流を勧め、仲間外れを作らないことに注意喚起した。話し合いのとき、なかなか自分から話を切り出せない人がある場合は、話を切り出ししやすいような雰囲気とサポートを行った。しかし、まだまだ試行錯誤の状態での授業であり、学生とよりよい社会科の授業づくりを話し合いながら進めている状況にある。

「社会科」の授業実践では「知識伝達型」の授業から脱却し、子供一人一人が社会的事象に主体的にかかわり、社会認識を深めること。その上で、「社会とのよりよいかかわり方や参加の仕方を学び」、「社会参画力の基礎」を養うことが重要である。<sup>11)</sup> アクティブ・ラーニングの手法そのものは社会科において少なくとも戦後において取り組まれてきており、目新しいことではないという指摘もある。しかし、今日の「アクティブ・ラーニング」は、大学、高等学校および義務教育学校等における授業への単なる「経験的活動」の導入というレベルでとらえるべきではなく、子供の実態に即した教師の授業設計力を要請する開発的な教育方法であり、「社会科」の授業のみならず、教科等を横断する汎用的スキルであると思われる。

#### 資料（本講義についての学生アンケート調査）

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか○で囲んでください。 (⑤大いにそう思う ④そう思う ③どちらともいえない ②あまりそう思わない ①そう思わない)	
1 この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
(1) 授業全体を通じての出席回数（次の中から選んでください） ⑤15回 ④14回 ③13回 ②12回 ①11回以下	⑤ ④ ③ ② ①
(2) この授業に積極的に参加した。	⑤ ④ ③ ② ①
(3) この授業の履修に当たって十分な準備をした。	⑤ ④ ③ ② ①
(4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした。	⑤ ④ ③ ② ①
(5) シラバス（講義内容）は受講に役立った。	⑤ ④ ③ ② ①
(6) この授業に関連して授業以外に学習した時間（次の中から選んでください） 平均して、⑤5時間以上（__時間程度） ④4時間程度 ③3時間程度 ②2時間程度 ①1時間程度	⑤ ④ ③ ② ①

<b>2 この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>	
(1) 聞きやすい授業だった。	⑤ ④ ③ ② ①
(2) 各回の授業内容の量が適切だった。	⑤ ④ ③ ② ①
(3) 授業中の「事前学習」や「振り返り」が役に立った。	⑤ ④ ③ ② ①
(4) 授業のルール（授業開始・終了後のあいさつ、脱帽、飲食なし等）が保たれていた。	⑤ ④ ③ ② ①
(5) アクティブ・シートや補助資料が効果的だった。	⑤ ④ ③ ② ①
(6) アクティブ・シートの「コメント」を毎回丹念に読んだ。	⑤ ④ ③ ② ①
<b>3 この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。</b>	
(1) 自分にとって新しい考え方・発想	⑤ ④ ③ ② ①
(2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	⑤ ④ ③ ② ①
(3) 自分で調べ、考える姿勢	⑤ ④ ③ ② ①
(4) 個人でまとめる際に有効だった、グループでの話し合い、全体の発表	⑤ ④ ③ ② ①
<b>4 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>	
(1) 分かりやすい授業だった。	⑤ ④ ③ ② ①
(2) 教員の熱意が伝わってきた。	⑤ ④ ③ ② ①
(3) 教員は学生の質問・発言等に誠実に対応した。	⑤ ④ ③ ② ①
(4) 授業全体の目標が明確だった。	⑤ ④ ③ ② ①
(5) 学校現場に出てから生かせる内容だった。	⑤ ④ ③ ② ①
(6) この授業を受けて満足した。	⑤ ④ ③ ② ①

「授業を振り返って（評価）」のグラフ



上記の授業評価アンケートの結果を概観すると、以下のようなことが言える。

1 授業への取り組み方

学生は、授業に意欲的かつ積極的に参加した。授業以外で本授業に関する学習は平均して週2時間程度行っていたこともわかる

2 授業の進め方

学生は、授業の進め方についても概ね満足していることがわかる。

特に「アクティブ・シート」による授業の振り返りが有効であったこともわかる。

3 授業から得たこと

学生は、本授業から発想や意欲、話し合いの方法等を学んだと感じている。

4 総合的な評価

学生は、本授業や担当教官に対して、概ね肯定的な意識をもっていることがわかる。

#### 引用文献

- 1) 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を開くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」
- 2) 宇佐美寛 (2012) 『大学の授業』はじめにV (東信堂)
- 3) 中央教育審議会教育課程企画特別部会中間報告 (2016) 「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ (素案)」
- 4) 文部科学大臣諮問 (2014) 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)」
- 5) 大西俊弘文 (2014) 「『アクティブ・ラーニング』と日本の学校教育」(龍谷教職ジャーナル第3号)
- 6) 中央教育審議会 (2014) 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせために～ (答申)」
- 7) 教育再生実行会議 (2015) 「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について (第七次提言)」
- 8) 中央教育審議会 (2015) 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)」
- 9) 教育課程企画特別部会 (2016) 「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ (素案)」
- 10) 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領社会編」(東洋館出版社)
- 11) 北俊夫・向山行雄 (2016) 「アクティブ・ラーニングでつくる新しい社会科授業」(学芸みらい社)

## Active learning-Like Design of Elementary School Social Study Research and Its Practice Analysis

Shigeo Matsumoto

The argument has been raised that active learning is necessary as an opportunity to improve original teaching and learning methods at universities. Active learning is considered to be a pressing issue in the promotion of high-quality baccalaureate degree program education. Human resources who will have a lifelong learning capacity and the ability to think independently and proactively cannot be fostered through education that is based on passive learning from the viewpoint of students. In active learning, teachers and students work hard and learn together through mutual communication, creating space to grow intellectually through mutual stimulation, and this leads students to discover and solve problems on their own initiatives. The conversion from conventional classes, in which teachers pass on their knowledge by cramming it into students, to active learning is in harmony with the concept of university educational reform.

In elementary, junior high, and high school education, proactive and cooperative learning aimed at the discovery and solution of problems has been mentioned in government-initiated educational inquiries, point summaries, reports, suggestions, replies, and other procedures and has come to be called active learning.

I attempted to conduct active learning-based classes in “Research in Elementary School Social Studies,” a course now offered at my university. I planned classes for students—not to passively read given materials and listen to lectures, but to actively investigate and think on their own, and discuss with other students. For that purpose, I attempted to introduce discovery learning, problem-solving learning, on-site training, and investigative learning, together with group work and group discussion. In fact, however, it was impossible to implement all of these activities in the face of time and other constraints. I therefore focused on teaching the fundamentals of class content that would be useful in the classroom when students became teachers in future. My challenge has only just begun, and there are many issues. Many of my students have great potential, aspiring to be the teachers who will carry our future school education.